

ミライカナエル活動サポート事業  
スタート支援コース・ステップアップ支援コース審査会 議事録

1 日 時

2020年（令和2年）8月29日（土）午前10時00分～午後1時09分

2 場 所

藤沢市役所本庁舎5階 5-1会議室

3 出席者

(1) 委員 7人

山岡委員長、坂井委員、大久保委員、鎌倉委員、島田委員、林委員、原田委員

(2) 市側 6人

福室参事、藤岡主幹、一瀬主査、浅野主任、緒方主任、  
伴走支援者（関内イノベーションイニシアティブ株式会社）

(3) 提案団体 5団体

- ①障がいのアナ
- ②SASP (Sustainable Arts & Sports Project)
- ③ホームスクリーングで輝くみらいタウンプロジェクト
- ④湘南FP相談室
- ⑤おととき♪
- ⑥特定非営利活動法人 湘南食育ラボ
- ⑦湘南市民ワークショップ

(4) 傍聴者 6人

4 議 題

- (1) ミライカナエル活動サポート事業スタート支援コース・ステップアップ支援コース  
審査会公開プレゼンテーション
- (2) ミライカナエル活動サポート事業スタート支援コース・ステップアップ支援コース  
審査会（非公開）

## 5 配布資料

- (1) ミライカナエル活動サポート事業スタート支援コース・ステップアップ支援コース  
プレゼンテーション（冊子）
- (2) プレゼンテーション予定表
- (3) コースの説明及び審査選考、評価項目等

## 6 開催概要

### 議題1 ミライカナエル活動サポート事業スタート支援コース・ステップアップ支援コース審査会公開プレゼンテーション

○事務局より公開プレゼンテーションの進行について説明があった。

÷÷÷÷÷÷÷÷÷÷÷÷÷÷÷÷÷÷÷÷÷÷÷÷÷÷÷÷÷÷

○令和2年度ミライカナエル活動サポート事業スタート支援コース・ステップアップ支援コース提案団体5団体が公開プレゼンテーションを実施した。

(山岡委員長) それでは、お待たせいたしました。これより公開プレゼンテーションを行っていただきます。まず、スタート支援コースからです。1番目、スタート支援コース一般枠の障がいのアナさん、「リモートとメディアで繋ぐ『障がいのアナ』」について発表をお願いします。

(障がいのアナ) よろしく願いいたします。障がいのアナの小川優と申します。

私たちは、ことしの1月に設立したばかりの団体となります。今日はよろしくお願い致します。

さて、今回の流れです。私たちの団体紹介、そして事業の内容や展開、3年後に描く「ミライ」という形で進めさせていただきます。

最初に、団体の紹介です。「障がいのアナ」という名前に団体の活動目的が入っているのですが、私たちは、なぜか分かれてしまっている世界をつなげていきたいと思っています。それは、障がいのあるかないもそうですし、福祉の現場にいると感ずる福祉と社会というものもそうです。同じものであるはずなのに、分類化され、どこか切り離された存在になっている。そうしてできた壁に穴をあけたいと思っています。

イラストをごらんください。理解できないことが多いと、人は恐怖を感じて当たり前です。また、関心がないということも1つ、大きな壁をつくります。その壁に穴をあけるのが「障がいのアナ」です。穴をあけるには、知識だけでなく、伝える工夫と伝わる工夫が必要だと思っています。

そして、私たちの最大の強みは、構成するメンバーです。福祉の分野にもたけていて、かつ、福祉以外の分野も知っているということです。かけ橋になるためには、両方の視点を持つことが非常に重要だと思っています。それを生かして活動を行っていきたくと考えています。

さて、私たちの活動は、記事を作成して、読んでもらうというものです。メインはインタビューの記事で、藤沢市内の、障がいを感じて近くにいる方の声を伝え、「知り合いの記事になっているから」という拡散機能を使い、多くの方に情報を伝えようと考えていました。しかし、活動をスタートさせる4月にはコロナが蔓延していたということもあり、インタビューを1本も行うことなく休止しました。そして、コロナ禍では、毎月の会議をZoomで行い、団体内で検討しながら、コラム記事だけ動かすような形にしています。

相互チェックとして、LINEのノート機能を使って、出した記事をみんなで読む。そして、意見を出し合い、修正を加えて、サイトにアップをする。そういった形をとっています。

この画面は、スマホから見た私たちのサイトです。見やすくなるようリニューアルを加えたいと考えています。そして、音声化している記事もあつたりします。少しだけですけど、お聞きください。

(音声再生)

皆さん、こんにちは。小川優です。ホームページをごらんいただき、ありがとうございます。市民活動団体、障がいのアナは、神奈川県藤沢市を中心に、障がいや福祉の情報を発信し、知るということをきっかけに、社会をやわらかくしていきたいと考えています。

こんな形で記事を読み上げることで、視覚支援ではないですけど、作業しながら記事を読みたい、聞きたいという方もいるかなと思い、工夫をしています。

さて、それでは、本題の事業についてです。

先ほど説明した認識の壁というものは、コロナ禍でより厚くなっていると想定しています。その理由は、人との接触が減っていること。それに伴い、障がいと出会う機会も減る。また、嫌悪感を抱くシーンがふえる可能性があります。例えば、視覚障害の方、手が目のかわりになっている方です。物をさわります。人の体もさわります。また、マスクができない方、距離感がとれない方もいます。認識の偏りが生まれやすい今だからこそ、私たちの活動に意味があるのではないかと考えています。

そして、先ほどお伝えした私たちの強みを生かし、リモートによるインタビュー、また、ウィズコロナでの新しい情報発信を考えています。

具体的には、グーグルフォームを活用したアンケート調査、Zoomを用いたインタビ

ューを行います。2つのツールは、セキュリティーを重視して選びました。そこから記事を作成していく。また、コロナの影響もあり、在宅で情報を得る機会がふえているため、SNS や LINE など、従来の紙ベースの発信よりも電子媒体での発信に力を入れていきます。

事業展開については、ごらんのとおりです。ベースラインとして、取材、記事の作成、周知、データによるチラシの配信を行います。加えて、紙版のチラシの作成、中間評価、最終評価に合わせ、閲覧者アンケートを実施し、そこで読者のニーズも取り入れていきたいと思っています。これを評価の指標としていきます。

次に、数値的な目標です。インタビュー記事については、月に2～3本。1カ月準備期間です。7カ月で16記事を想定しています。

周知する媒体は、以下の3つを考えています。月に1回は、LINE for Business により、データ版のチラシを配信していきます。紙版のチラシについては2000枚を作成し、配架先はごらんの場所を想定しています。

また、市の広報誌や回覧を考えているかというアドバイスをいただきました。私たち、想定はしていなかったのですが、広くサイトの閲覧者をふやしたいと考えているため、大変ありがたい内容だなと思っています。今後検討していきたいと思っています。

そして、最大の数値目標は、最低閲覧者数、現在3424から、16記事を書いた時点で5万までふやすことを目指しています。この数字は、気まぐれ新規と想定するたまたまサイトを見る人数、また、定着率、定着したファン1人が紹介する人数から算出しています。こちらを目標に掲げています。

次に、予算です。団体負担金を加えた状態で下記の支出を考えています。内訳は表記のとおりですが、広告宣伝を2つに分けています。見やすく、発注先ごとに行ってみました。メインビジュアルに関しては、冊子の第5号様式にも載せてありますので、そちらをごらんください。

次に、配慮事項です。個人情報を取り扱います。団体のホームページにも載せていますが、プライバシーポリシーに従い、適切に管理を行ってまいります。また、同意書についても、リモート版として、新たに弁護士さんと相談しながら作成していきたいと思っています。

最後に、3年後の「ミライ」です。抽象的ですが、障がいという言葉がもっとやわらかくなる社会を目指しています。もっと先の「ミライ」は、「障がい」という言葉がな

くなる社会です。具体的な内容は、ごらんください。大きな要としては、とにかく私たちが継続することです。記事を発信し続け、読者をふやし続け、そして、資金源も調達する。それは右下の部分をごらんいただければと思います。

また、新規の閲覧者数、そして紹介者数等をふやすことにより、読者のバリエーションをふやすことができるのではと想定しています。従来のメディアと同じ片方向の発信ですが、今後の動きとしては、読者や社会ニーズを把握するために、インタラクティブな動きも必要だと想定しています。

私たちは何せ1月に設立したばかりの団体です。まだまだできていないことのほうが多いのですが、ウィズコロナで頑張っていきたいと思いますので、どうぞよろしく願います。(拍手)

(山岡委員長) ご発表ありがとうございました。

発表が終わりましたので、委員の方、ご質問等があればよろしく願います。

(原田委員) 社会課題であったりとか、「障がい」という言葉がなくなる未来を目指すという点に非常に共感するところがあります。私も、発達障がいの子どもとか知的の子とか、母が認知症だったりするので、今の社会のままでは今後立ち行かなくなると日常感じているのです。そういう意味で、目的はよくわかるんです。SNS を使って広報活動をするということだと思のですが、今まで興味のない方や、こういう状況を知らない方に対してどのように知ってもらうかが大事なことだと思うのです。その点については、具体的な施策がちょっと弱いかなという気がするのですが、そのあたりはどのようにお考えでしょうか。

(障がいのアナ) 今おっしゃっていただいたように、興味のない方に知っていただかなくては全く意味のない活動だと思っています。内輪で「福祉っていいよね」という話をするのでは意味がありません。私たちが想定する方法として、まず、記事の書き方。それはタイトルからの持ち方もそうだと思うのですけれど、いかにして障がいというものが関係ない方であっても読みたくなるものにするか。例えば、社会の中で、電車に乗っていると、なぜかしゃべり続ける子どもたちがいる、あの子たちは何なんだろうということは、福祉の中であれば、あえて取り上げない内容です。ただし、私たちの身近なところというと、そういった視点から入っていくというのも大事なかなと思います。

広報的な部分なんですけれど、人をうまく使うというのが私たちはポイントに挙げているものでもあって、その記事に取り上げる人、今回、障がいに身近な人という言い方

をしたのですけれど、もちろん当事者、ご家族、福祉で働く方、あとは、そうではなく障がいを見たことがある方を全て含んでいます。なので、一般の方も含めインタビューを行っていき、一般の方がどのように障がいを地域の中で捉えているか、それもひとつ記事にする必要があるのではないかなと考えています。

以上でお答えになりましたでしょうか。

(坂井副委員長) 今回、助成金を仮に得られたとして、この事業がそれを元手にしてできるのだと思うのですけれども、助成金がなくなった後ですね。会員を増強するとかそういったことで乗り切る資金源ですけれども、具体的に、例えば正会員を何人ぐらいにしたいとか、賛助会員を何人ぐらいにしたいとか、そういった目標みたいなものはあるのでしょうか。

(障がいのアナ) 今、私たちの団体は、正会員を 3000 円、賛助会員を 500 円という形でやっています。ただ、今年しに関しては、まだ事業を立ち上げて安定していないというところもあり、正会員をたくさんふやすことが果たしていいものか、団体の中で話し合いました。なので、今の時点では、具体的に正会員を何人までとは想定していないのですけれども、賛助会員に関して、今回必要になっている金額は、これなんですね。この中で継続的に必要なものとしては、Zoom の金額、あとは LINE for Business、ただ、これに関しては、送る相手が少ないと、私たち、無料になってしまうので、もしかすると返還金にはなるのですけれど、これを継続するために必要なものとしては、賛助会員、10 万は必要だなと。10 万という言い方もざっくりなんですけれど、とにかく人数は必要だなということは想定しています。ただ、その具体策をまだ立てていないのが現状です。

(山岡委員長) 壁に穴をあけていくというのはすごくわかりやすく、とても大切で、必要なことだと思います。今、このコロナの状況の中で、それを、オンラインを使ってやっていこうというのもいいと思うんですけど、現実的にここの壁に穴をあけていくためには、私はやっぱりオンラインだけでは難しいのではないかなと。実際そういう障がいのある方たちとかかわったり、ともに時間を過ごしたりとか、そういうリアルなことが、今はできないですけど、そういうことが必要だと思うのです。いずれそういうことも考えておられるのか。コロナ後をですね。そういう見通しとかお考えとかがあれば、教えていただきたいと思います。

(障がいのアナ) この事業の中ではないですし、具体的に3年後の中にも、今チラシ等は

ないのですけれど、私たちも同じように考えていて、体験的に知るというのがすごく大事だと思っています。そのため、団体の中で話しているのは、コロナが明けて落ちついた暁には、私たちがツアーガイドみたいな形で福祉施設を一緒に回るようなことをやった場合、一番悲しいのは、「ああ、福祉の現場って大変ね」とか、あと、「この子たちってつらいわね」みたいな形で、「つらい」とかそういった表現になってしまうと、具体的な学びとか、具体的な「知る」ではないと思っています。なので、この子たちがこれだけのことができるんだ、この人たちの尊厳って素晴らしいんだということをあわせて一緒に考えていけるようなツアー形式が、方法としては一番リアリティーがあるんじゃないかなということを考えています。

(林委員) 社会を分けないというのはすごくいいなと思っています。

16 記事を目指すということで、これは現実的にできる数ということで算出されていると思うのですけれども、例えばどんなところにインタビューをしていきたいのか。

それから、この 16 記事で自分たちの活動のどれぐらいの部分が達成できるのか。1 年目では 1% もいかないよということなのか、範囲としては割かしカバーできるかなと思っているのか、そこら辺の思いをお聞かせください。

(障がいのアナ) 最後の、継続というところでもあるのですけれど、16 記事ではカバーはし切れなと思っています。なので、3 年後までの目標に、とにかく私たちが継続することですという言い方をしたのは、ここでは完成しませんので、続けていくことというのが大事になります。

取材先なんですけれど、これはすごく嫌らしい話にはなってしまうのですけれど、障がい福祉に関しては、市内で注目を集めている福祉施設というところで捉えています。それは、私たちが算出した数字もそうなんですけれど、気まぐれに見てくれる新規数を 350 と置いています。これは今現在の私たちの SNS のフォロワーの人数です。プラス 1 人当たりのファンが紹介する人数を 1 と置いています。定着を半分の人、0.5 です。

そのときに、やはり人頼みのインタビューではありますので、注目されている、というのは本当に嫌らしい言い方なんですけれど、注目されている団体。「障がい」という名前がついているので、最初は私たちも障がい福祉を想定していきます。ただ、私たちの使うこの「障がい」というのは、本来は社会の中での障がいという意味なので、高齢福祉であったり、児童福祉であったり、それこそ不登校なども対象だと思っています。社会の何かが変わることで、私たちは捉え方がもっとやわらかくなるんじゃないか、方



法が見つけれられるんじゃないかというのを狙っています。

なので、前半では、障がい福祉で、明らかに私たちの団体名と一致する内容を置いていくんですけど、後半については、私たちがやりたい幅広い障がいというものに持っていきたいと思っています。

(山岡委員長) それでは時間になりましたので、質疑はこの辺で終わりにしたいと思います。ご発表ありがとうございました。

(障がいのアナ) どうもありがとうございました。(拍手)

÷÷÷÷÷÷÷÷÷÷÷÷÷÷÷÷÷÷÷÷÷÷÷÷÷÷÷

(山岡委員長) 続きまして、2番目、スタート支援コース、ユース枠の SASP (Sustainable Arts & Sports Project) さん、「子供ミュージカル上演の為のワークショップ」について、発表をお願いします。

(SASP) おはようございます。今回、Sustainable Arts & Sports Project、通称 SASP の代表を務めます小宮です。よろしくお願いいいたします。

最初に、簡単な僕の自己紹介と、団体を立ち上げた経緯についてお話しさせていただきます。まず、僕はことし 20 歳になります。音楽大学に通っている大学 2 年生なのですが、幼少のころ、小学 1 年生、7 歳のころから、さまざまな芸能活動を行ってきています。主に舞台やミュージカルや、たびたび映像などにも出演させていただいたりして、現在も役者としていろいろな活動をさせていただいています。

代表的な例を少し紹介させていただくと、帝国劇場の「レ・ミゼラブル」というミュージカルだったり、松竹の歌舞伎座の子役として 1 年半ぐらいやらせていただいたり、映像で言うと、今はもう終わってしまっていますが、ドラマ「水戸黄門」に出させていただいたり、さまざまなことをさせていただいています。

このように、さまざまなものに出させていただいて、恵まれた場にいられたと思っていたのですが、そんな僕がなぜこの団体を立ち上げたのかといいますと、実は中学、高校時代に、学業と芸能活動の両立にすごく苦しんだ時期がありました。どうしても学校側の理解が得られず、最終的には、どうしても出演したい舞台があったのですが、それに出演する許可が得られなかったのです。それで転校を余儀なくされてしまったという経験がありました。それが僕、本当に悔しくて、だからこそ、もっと多くの人々に文化芸術の楽しさや重要性などを知ってもらいたいと強く思うようになりました。

そもそもなぜ文化芸術がそんなに大切だと僕が感じているかといいますと、文化芸術、

すなわち歌だったりダンス、美術、あとスポーツなども含まれると思っていますが、それらに共通して言えることというのが、携わる人間の個性だったり、多様性を尊重しながらコミュニケーション能力を高めることができ、心を豊かにすることができる点だと僕は考えています。そして、そのコミュニケーション能力がすごく大事だと思っているのですが、それは今、国際社会で最も求められている能力ではないかと思っています。機械化だったり、AI化がますます進む現代において、人間にしかできないことであると思っています。それはやっぱり今後重要な価値観になっていくのではないかと考えています。

次のグラフをごらんください。日本の現状について少し説明させていただきたいのですが、ごらんとおり、このグラフの緑が、国の文化の国民からの寄附金の割合を示しています。青が国家の文化予算の割合を示しています。アメリカは、国民の文化の寄附金の割合が非常に高いのです。国としてはそこまで文化のお金を用意していなくても、国民たちの興味関心から文化芸術が成り立っていると言っても過言ではありません。また、フランスや韓国をごらんになったらおわかりだと思うのですが、国として文化芸術に非常に力を入れています。対して日本を見ると、国としてもそこまで力を入れられず、国民の関心としても、寄附の割合からわかるとおり、あまり関心が抱けていない現状が見受けられると思います。このような、日本の現状を踏まえた上で、僕たちは、文化芸術の理解を広げていきたいと思い、役者として、子役として一緒に頑張ってきたメンバーを誘って、今回この団体、SASP を立ち上げることになりました。

改めて団体の紹介をさせてください。団体のメンバーは、全員が元子役。僕の仲間であった人たちで、現役のアーティストです。自分たちがミュージカルなどの世界で活躍することを目指しながら、一流の演者さんやその指導者の方から学んできた経験を生かして、子どもたちに文化芸術の楽しさを知ってもらうためのワークショップなどを行ったり、あとは僕たちの活動を認知してもらうために、さまざまなイベントでライブパフォーマンスを行う。その2つを主軸として活動しています。その活動のためのオリジナルソングの制作を最近はしていたりします。

ここ1年の活動ですが、僕たちの団体は2018年12月に立ち上げたばかりで、正直、学生団体なので、最初はどこから始めていけばいいかわからず、迷走していたところであったのですが、たまたま拝見したオリンピックを盛り上げる応援団のイベントに参加させていただいて、そこでうまくいつながりなどを得ることができまして、市民まつ

りだったり、いろんなイベントに参加させていただくことができませんでした。その中で、僕たちがずっとやりたかった子どもたちのワークショップも、簡易的ではありますが、実現することができました。

今回の本題ですが、僕たちは、この助成事業で、ワークショップをもっと本格的に行いたいと思っています。まず、昨年開催できたことで、これからもっと本格的にやっていきたい、その軌道に乗せていくための費用をお願いしたいと思って、今回出させていただきました。

現在考えている内容としては、月1回から2回を目安としたワークショップを行います。また、本当の楽しさを感じてもらうためには、やはり1回限りのワークショップなどではまだ足りないかなと感じているので、継続的にワークショップを行って、段階的に、ミニコンサートなどの実施も経て、最終的にはオリジナルミュージカルの上演を目標にして、計画していきたいと考えています。

助成金の使い方に関してですが、今回、主に2つ、大変な点があると思います。現在、コロナウイルスの影響もあって、実施の方法だったり、集客、広報についての問題があると思っています。その2つについて助成金をうまく運用していけたらと思っています。

その方法についてですが、基本的には対面でのワークショップを行いたいと思っていますので、対面の場合は、新型コロナウイルスの対策を十分実施して、やっていきたいと思っています。万が一、対面がかなわなかった場合は、オンラインで、今はやりのZoomなどの通信アプリを活用していきたいなと思っています。

次に、集客、広報に関してですが、SNSを活用するとか、チラシなどをつくって、さまざまところで紹介していただけたらいいなと思っています。既につながりがあるところであったり、藤沢ビッグウェーブだったり、市民活動推進センターの方々にも相談して、協力していただけたらと考えています。

最後に、オリンピック延期はSASPにとっても、逆にチャンスだと考えています。なぜなら、オリンピックというのは、やはりスポーツだけではなく、その前後期間で文化芸術の祭典でもあって、いろいろな活動を行うことができます。その活動期間が1年延びたと前向きに考えて、僕たちは頑張っていこうと思っています。

ご清聴ありがとうございました。(拍手)

(山岡委員長) ご発表ありがとうございました。

それでは、委員の方、ご質問はありますでしょうか。

(原田委員) 文化芸術の必要性であるとかコミュニケーション能力の向上や表現力の獲得など非常に理解するところがあると思っています。ただ、現状でもこういう演劇のサークルですとか藤沢でも子どもたちのミュージカルみたいなものがあると思うのですが、そことは違う強みというところをお聞かせいただきたいのですが。現状は、元子役であったり、アーティストの方が子どもたちを直接指導するというところだと思いますが、具体的にどういう強みがあるのかについて、お聞かせいただければと思います。

(SASP) 今おっしゃっていただいたとおり、僕たちは元子役で、まだ学生とはいえ、キャリアとしては芸能界では10年以上の経験を持っております。子どもたちを主な対象としているので、子どもたちとしても、年代の近いお兄さん、お姉さんの立場でいろいろな活動を行えることは、1つの強みだと感じています。

そして、僕たちは、さっきも伝えたのですが、個性をすごく大事にしたいと考えています。なので、ワークショップなどの活動でも、子どもたち一人一人の個性を生かした活動だったり、個性を輝かしてあげられるようなことを行っていきたいと考えております。

(坂井副委員長) 最初に団体の紹介をいただいたときに、学業との両立というところで苦労があったと伺いましたけれども、今回のこの事業というのは、そういった面へのアプローチといいますか、学校へのアプローチみたいなもので何かお考えがあれば、伺いたいと思います。

(SASP) 僕自身、もちろん学業が学生の本分であるので、とても大事なことだと思っはいるのですが、やっぱり学業以外に、みんな習い事とかをやっているじゃないですか。学業だけじゃなくて、そういうほかのこともすごく大事なんだよということを学校側に伝えた上で、活動の紹介だったり行って、チラシの配布などもお願いしたりとかしていけたらなと考えています。

(山岡委員長) 大学も通われていて、芸能活動もされている。さらに市民活動も。すごいなど、正直、思います。こういうことがあれば、子どもたちにとってすごくいい機会だなと思います。

今のところ、繰り返しのワークショップでミニコンサートとか、そういうものに何人ぐらいの、あと、どれぐらいの世代の幅の子どもたちを対象にしようとしているのか。初年度に関して結構ですけども、教えてください。

(SASP) まず、どれぐらいの人数かというのは、その最終目的であるオリジナルミュー

ジカルの上演に関して、できるだけ多くの子どもたちを出演させてあげたいという気持ちではいるのですが、現在、このコロナの影響だったり、多人数にはしづらいところもあったり、あとは僕たちの方針で、個性を重視しているので、できるだけ多くの子どもたちを一人一人見てあげたいので、数をできるだけ絞って行いたいと思っています。現状としては、オリジナルミュージカル本番のときは 50 人程度かなと。ダブルキャストなどにして、一回の公演に出演するのは 20 人チョイぐらいを想定しています。ただ、この計画自体は1年、2年と考えているので、それに子どもたちが全員ずっとついてくるとは考えてはいなくて、最初のワークショップの段階では、回数は分けて 50 人以上、もう少し多く、60~70 で集めて、行っていけたらと考えています。

(山岡委員長) ほかにいかがでしょうか。よろしいですかね。特になければ、ここで質疑は終わりにしたいと思います。どうもありがとうございました。

(SASP) ありがとうございました。(拍手)

÷÷÷÷÷÷÷÷÷÷÷÷÷÷÷÷÷÷÷÷÷÷÷

(山岡委員長) それでは、ここからはステップアップ支援コースのプレゼンテーションになります。3団体目です。ホームスクーリングで輝くみらいタウンプロジェクトさんです。「ホームスクーリングタウン事業」について、発表をお願いします。

(ホームスクーリングで輝くみらいタウンプロジェクト) ホームスクーリングで輝くみらいタウンプロジェクト、小沼陽子です。よろしくお願いいたします。

社会の現状として、今、小中学生の不登校児は 16 万人以上で、どんどん増えています。そのうちの不登校の9割方が家庭で過ごしているというデータも出ています。私たちは、学校に行ってもいいし、でも、行かなくても大丈夫、そういう社会を目指して活動しています。ホームスクーリングというと、家の中で親子で勉強するとか、そういうイメージをされる方がいると思うのですが、私たちは地域みんながホームというホームスクーリングを目指しています。子どもたちが地域の施設を自由に使って思いっきり学ぶというイメージです。

根本原因として、子どもはどれも変わっているんだけど、親が自分の昔の価値観から変われない大人の問題と私たちは捉えています。

ちょっと私の自己紹介です。私は今、藤沢に住んでいて、長男が高校2年、長女が中学2年。2017年2月に、このプロジェクトを立ち上げました。それなりに楽しい日々を過ごしてきたんですけど、他人の顔色を気にしたりとか、自分の気持ちを明確に伝え

られないとか、そういう人生だったなと思います。

その転換のきっかけが、息子の不登校だったんですね。私は自分が学校が楽しかったタイプなので、子どもが学校に行くことが一番いいことだと思って、けんかの日々が数年続きました。あるとき、子どもが逃げ回って、マンションの非常階段から落ちちゃうんじゃないかというのを見て、子どもを学校に連れていくことで、もしも死んじゃったら、私は何をやっていただとなる。そこからすごく変わって、何で学校って行かなくちゃいけないんだろうとか、逆に私は何で学校に行ったんだろうとか、すごく考えるようになりました。そこから、うちはうちの生き方でということで、家庭で過ごそう、「もういいよ、行かなくて」となりまして、私も、子どもたちもどんどん元気になりました。

ただ、実はそこから本当に孤独な日々が始まって、ここ（スライド）に書いてあるようなことを毎日、私も、職場でも両親からも言われ続けるつらい日々が何年も続きました。

私たちは元気になっているのだけれども、どうも生きづらい社会で、私たちのように、ルールから外れちゃった子どもたちがもっと生きやすい社会になるように、私も何か役に立ちたい、そういう思いから、このプロジェクトを立ち上げました。

朝カフェという親同士のつながりをつくったりとか、著名な方に来てもらって啓蒙活動を行ったりとか。あと、畑。これは藤沢市の助成金を活用させてもらって、車から出られなかった子も、最後は畑の手伝いをしてくれたりとか、とてもうれしかったです。コロナが始まってからは、オンラインで月2回ぐらいは勉強会をやっています。パブコメも、多様な学びを提案したり提出したり、視察も、助成金を活用させてもらって、キャンパススマイル、地域のつながり方を体で感じる体験ができました。

運営のチェック体制は今、こういう形（スライド）です。

活動を始めて3年半になるのですが、わかったことというのが、親が変わると、やっぱり子どもがどんどん元気になっていく。それを実感しました。あと、大人はそれぞれの子どもの成長に応じて環境を用意することが大事だなということと、ホームスクーリングというのは、親がフルタイムで仕事を続けながらというのは難しい。

プロジェクトの課題としては、発信力の弱さ。①～⑤の5つをこの期間中にもっと掘り下げていきたいなと思っています。

できたこととして、LINE グループが今 70 名。9割方が当事者の母親で、悩みを共有したり、情報共有、勉強会なんかを頻繁にやっています。

「次の3年 やりたいこと」。親の好きなこと、スキルをもっと見える化して、親同士のシェアシステムをつくりたいと思っています。なぜかという、ホームスクーリングは親の負担が大きい。フルタイムで仕事を継続するのは難しいですし、フリースクールとかファミサポは、子どもが嫌がることが多いんですね。結局、親も自由に活動できなくて、ホームスクーラーへの資金的援助もない。だから、私たちはこのシステムを使って、親の負担を減らして、親自身も安心して自由に活動できるようになればいいなと思っています。そうやって自分の好きなことやスキルを活用して、経済的な自立に使ってもらったりとか、好きなことを共有して仲間をふやしたり、結構いろいろ学んでいる方が多いので、そういう知識をみんなでも共有して一緒に成長していったり。もともと不登校の親同士なので、不登校親子に対する理解もあって、安心して参加してもらえます。

それには今のLINEグループをもうちよっと発展させようと思っています、例えばこういう英語の勉強会を親がやってくれたら1回1000円とか、それを運営と、その親と半々にしたり、年会費1万円とか取って、シェア畑を自由に使えますよとか、そういうふうにしていこうと思っています。それを足がかりに、地域全体にサポーターをふやしていきたいと思っています。そのときに、サポーターズポイント制度をイメージしています。例えば、親とか地域のサポーターの方が勉強を教えてくれたりしたら、サンクスポイントカードを発行して、それが事務キチ、有隣堂とかいろんなお店で使えますよという協賛をこれからしていったら、あとは藤沢市のプールを使えますよとか、そういうふうにできたらいいなと思っています。

学校とももっとつながりをつくっていかなくちゃいけないと思っています。今、こちらの彼女がやっているのですけれども、同じプロジェクトメンバーが辻小の中で不登校の親同士のサークルを立ち上げたりしているのですが、学校との連携をもっと深めていこうと思っています。

あと、海外です。海外は今、アメリカには300万人以上のホームスクーラーがいると言われていて、私自身もフィリピンのホームスクーラーの家に親子でホームステイで行ったりとかいうやりとりをしているのですが、それをもっと広げて、グローバルなつながりをつくっていききたいと思っています。

新型コロナウイルスで子どもたちが学校に行けないという問題から新たに見えてきたことですが、このホームスクーリングタウンをつくるということは、不登校以外の子ども

もや家庭にも必要とされているというのをすごく実感しています。私たちは学校に行けないというので、ずっと悩んできたので、その経験とか知見がますます必要とされているなと思います。

藤沢市の現状はこちら（スライド）です。こちらでフリースクールが 11 団体登録されていて、私たちもその中に入っているのですが、私たちは当事者団体ですので、藤沢市に当事者の生の声を伝えていけたらいいなと思います。

助成金はこういった形（スライド）で活用する予定です。

2～3年後はシェアシステムを地域に広げていって、5年後にはホームスクーリングタウン藤沢モデルを全国に展開していきたい。それぐらい思っています。ということで、いろいろな場所を自由に使って学べる街、ホームスクーリングタウン、よろしくお願ひいたします。ご清聴ありがとうございました。（拍手）

（山岡委員長）ご発表ありがとうございます。

それでは、委員の皆様、ただいまの発表について、ご質問をお願いします。

（鎌倉委員）学校へ行かないとかそういうのは、いろいろ議論のあるところだと思うのですが、親として子どもに対して考えることというのは、いかに自立させるかだと思うんですね。それが何歳になろうか、どのような方法であろうかいいんですけども、親はいつまでも子どもの面倒を見てもらえない。だから、どのような教育をしようか、どのような育て方をしようか、最終目的は自立させること。これが本人にとっても親にとっても大切なことだと思うのですが、そこまでの道筋が今ちょっと見えない。学校を不登校になったときにどうしていくというのはあると思うのですが、最終的にその子が1人でしっかり生きていけるようになるという目標は、具体的にどのようにお持ちでしょうか。

（ホームスクーリングで輝くみらいタウンプロジェクト）学校に行ってもいいし、行かなくてもいいしというところで、学校が楽しければ、それで本当にラッキーで、オーケーで、どうしても合わない子というのがいて、その子たちは逆に学校に行かずに、たまに学校に顔を出したりということでますます元気になって、自分のやりたいことを思いっきり勉強していくんですね。そこが本当に自立につながっていく。親は家で何かをいろいろ教えるわけではなくて、子どもが興味のあることを見て、そこでサポートというか環境を整えるだけなんですね、私たちのやれることが。

うちの子もそうなんですけど、学校に行けば行くほど縮こまっていつちやって、テス



ト勉強だとかというのをすごく気にするタイプだったのです。それが、家にいると、どんどん自分で学んでいく。そういったところからも、成長、自立していく子というのがある。私とはタイプが全然違うのですが、親はそうやって子どもを一生懸命見て、その子に合った環境を整えて、自分で道を探していく。学校というレールが外れて、今度は親が見つけたレールをとると、結局同じことなので、親は一生懸命そこを見て、子どもが学びやすい環境を提供して、子どもが自分で学んでいって、自立していく。そういうことを日々考えています。

ちょっと一緒のメンバーも。

(ホームスクーリングで輝くみらいタウンプロジェクト) おっしゃるとおりだなと思っています。学校に行かなくなる子というのは、社会との関係がなくなってしまうので、そこを私たちは重要視というか一番問題だなと思っています。先生方と話しても、学校に来なくなってもいいけれど、そこは学校側として何を助けてあげたいか。校長先生とよく話すんですけど、そこで、ちょっとでもいいから学校とつながっているということで、必ずつながりができる。

学校にどうしても行けなくなってしまう子は、家にだけ。フリースクールとかに行ける子はいんですけど、行けない子というのは、縮こまってしまうので、そのためにも社会の方に、「学校に行っていないの?」と言うだけじゃなくて、藤沢市全体とか、町の皆さんが、学校に行っていないけど、でも、じゃ、何をしているんだろうと興味を持ってもらう。そういう場所が、彼らが将来、世の中に出ていくのに大事だなと思っています。これをやっております。

(原田委員) これまで3年間活動されていて、よく新聞などでも拝見していますが、活動内容としては、不登校になった子どもの親が変わるといえるか、親の考え方や視野を広げていくという活動だと理解しています。そういう側面はとても必要だと思っています。

ただ、今回、3年目のところで、ホームスクーリングタウン藤沢市モデルというところになると、やはり先ほどもおっしゃっていましたが、もっと生きやすい社会にしたいということからすると、社会とのかかわり、地域とのかかわりという視点をもうちょっと広げて、多様性がないといけないのかなと思うのです。

この具体的な事業展開の中では、ホームというのは地域、施設を使うことであったり、ほかの親がかかわってやっていくというところにちょっととどまっているのかなと思うのですけれども、地域の人々とかかわりだったり、社会に対して、不登校の子じゃない親

であったり、地域の高齢者であったり、そういう人に、どういうふうに認識をしてもらうのかということについて、どのようにお考えなのか、お聞かせください。

(ホームスクーリングで輝くみらいタウンプロジェクト) そこが本当に難しいところで、私自身、親同士のつながりがなくて、本当につらかったので、そこから親同士でつながってきたのです。でも、それだけだと本当に限界を感じてきているというのが今の段階で、その次にどう地域とつながっていったらいいのかというのを毎日模索しているところです。

その中のいろいろな仕掛けをしていかないといけないなと思っていて、実は今、メーリンググループで130人ぐらい、何かサポートしますよと言ってくれる方がいるんですけども、実際、どうかかわっていいかというところが、私たちもうまく組み合わせができなくて、その1つとしてサンクスポイント制度をやっていたらいいなと思っています。本当はいろいろやっていかなきゃいけないのですけれども、今、考えられるところというので、それを1つ進めていきたいと思っています。

(ホームスクーリングで輝くみらいタウンプロジェクト) それ以外に、学校とつながるグループというか私たちがそうなんですけど、そこが学校とつながることで、こういうところに出てこれないお母さんたち、孤独な方を学校が認めているというのはなんですが、先生たちがわかっているというところで集まってもらう。その会自体を地域の公民館とか薬局とか、今、メンタルクリニックとかにチラシを置いていただいている、それを個々のお母さんたちが皆、自主的にやっているのです。あと、カフェとかに置いてもらうことで、地域の方がみんな協力してくださってきているというか、「置いていいよ」という感じで、不登校の人たちに対する意識を愛情からというか、皆さん温かく受け入れてくださっているの、そういうところからもつながっていきたくと思っています。

(林委員) 私も、学校生活が楽しくて、でも、今の社会を考えたら、先ほどの小宮さんではないですけども、いろんな過ごし方があっていいんじゃないかなと思っていて、この活動って、やりたいことは本当にたくさんあると思うんですね。その中で今回、ミライカナエル活動サポート事業の50万円があるからこそできることって、どんなところなのかを教えていただければと思います。

(ホームスクーリングで輝くみらいタウンプロジェクト) 今、LINE グループのノートというところにどんどん自己紹介を張りつけたり、こんな活動をやっているんだとかとい

うのができ上がっているんですね。それをもう少しマッチングシステムのような形につくって、この方はこういうスキルがあったり、こういうのが好きだという自己紹介も見えるようにしたり、つながりをつくれるようにしたりというのをエンジニアの方とかに協力いただいたり、システム自体をどう組み立てていくかというシステムのところで使いたいと思います。

(山岡委員長) ほかにいかがでしょうか。よろしいですかね。じゃ、特になければ、以上で質問を終わりにしたいと思います。ご発表、ありがとうございました。

(ホームスクーリングで輝くみらいタウンプロジェクト) ありがとうございました。(拍手)

÷÷÷÷÷÷÷÷÷÷÷÷÷÷÷÷÷÷÷÷÷÷÷÷

(山岡委員長) 続きまして、4番目、湘南F P相談室さん、「市民の経済生活の諸問題解決支援」について、発表をお願いします。

(湘南F P相談室) それでは、始めさせていただきます。私は、湘南F P相談室の代表幹事の青木でございます。こちらにいますのが、代表幹事代行の橋本でございます。2人で説明させていただきます。よろしくお願いします。

私どもの活動については、資料の中にあまり詳しく書いてありませんので、それについて説明をしたいのですが、といいますのは、申込書といえますか書類をお読みいただいた委員の皆さんから、幾つか疑問とか質問をいただいております。

その中の大きなものの1つは、そもそもこういう事業は税金を使ってやる事業なのか、あるいは市民にとってどのような意義があるのかという基本的なご指摘。もう1つは、2～3年後以降の計画についてもっと詳しく説明をしてほしいという、2つがありますので、前者については私が説明し、後者について、橋本より説明いたします。

私どもは、基本的に、この事業が税金を使ってやる事業でもあり、非常に意義があると思っておりますが、ご承知かどうかあれですけれども、例えば政府の社会保障審議会の中でも、今後の非常に複雑化する企業の事情の中で、人生の伴走者としてF Pが機能すべきであるし、機能できる能力を持っていると言われております。そうしたことで個人の経済的諸問題を解決する、私どもはかかりつけ医になるという覚悟でやっております。

今までの具体的な活動について簡単に触れます。六会郷土づくり推進会議の中では、このような事業をやっております。セミナーは延べ 430 人集まった。その内容として

は、そこにいろいろ書いてあります。無料の相談会も、延べ 20 人やりまして、参加者の評価は非常に高うございます。

1 つ例を挙げますと、若い母親対象の教育資金講座。これには六会のホールに三十数人の子ども連れのお母さんが来てくださいます。保育のボランティアの人を雇っても足りないので、ホールにシートを敷いて、そこに子どもさんを遊ばせながら、教育資金についてのお話を聞いていただくということをやります。非常に評価が高うございました。この中で1つ、私が今でも覚えていますのは、皆さん、児童手当が支給されるのはご存じだと思いますが、例えばこの児童手当を 15 年間、ずっとためておきますと、200 万ぐらいになります。それ以外に、もちろん自分でためて、合計 400 万円ぐらいできれば、大学に入るときの大学資金の相当な部分ができる。そういう指摘もこういう中ではしてもらえぬわけです。

次が、私どもの湘南FP相談室の活動であります。2018 年 12 月に発足したのですが、まず1つの成果としては、19 年 4 月に藤沢市公益的市民活動助成金を獲得いたしました。そして、9 月にはセミナーをし、14 人の方。終わった後の相談会に参加いただいております。もう1つは、この 2 月に計画して、寸前までいったのですが、残念ながらコロナ禍ということで、できませんでした。これには 36 人の申し込みがありました。また、相談の申し込みも多数いただきました。ほかに、縁側団体とかいろいろな地域団体から協働事業の申し込みもありますし、既にリモートで個人からの相談については意見対応をしております。

団体の基本的な考え方は、抽象的ですが、ご承知のような世の中で、市民はやはり経済生活に非常に不安を持っている。特に、この後はそういう社会不安が一層深まる可能性がある。そうした中で我々が「町のかかりつけ医」ということで、活躍といいますか活動できる余地があるのではないかと考えております。

また、私どもは、2 番目にあります経済的な問題の解決と生活の安定こそが、市民の幸福と社会の安定につながる源であると思っておりますし、また、子どもの金銭教育も進めたいと思います。

今後の事業展開はこれからご説明しますが、2 行目に書いてございますように、市民自治部、生涯学習部、あるいは福祉健康部等々との連携事業を進めていきたいと思っております。それから、助成金がなくなった後も活動が進められるように、賛助会員の募集、あるいは自治会などと連携した包括的な相談事業の検討ということを進めたいと思っております。

(湘南F P相談室) 今、青木のほうからお話をさせていただきました我々の相談という事業のスキームをこちらに絵で描いております。我々は3年後のゴールはどこに置くかということになるのですが、ピンクとかだいたい色の枠の中が、我々相談事業のメインとするところでございます。F Pをご存じの方は、ざっくりわかるかと思うのですが、大きく6つのカテゴリーに合わせて、お金にまつわる部分、困ったな、これはどうしたらいいのということの相談事業。病気とか何かのときには必ず町のかかりつけ医に行く、そういうイメージです。最近、私個人としても一番多く相談があるのが、認知症になっちゃったんだけど、お金はどう出したらいいのとか、相続にまつわる問題です。私どもは、3年後のゴールとして「町のかかりつけ医」となることをイメージして、この申請をさせていただきました。その実現の手段をちょっとご支援いただきたいということです。

3年後のイメージですが、先ほどお話ししたとおり、六会地区からスタートしています。昨年度に湘南F P相談室という形をつくりました。今年度以降、コロナ禍の問題もあるので、かなりの部分、集合型からリモート型にしよう。2つ目として、組織体はボランティア型からNPO 法人ということの準備を開始しているのですけれども、そういった形にしよう。3つ目の、構造収益はどう考えていくのかということでは、今、賛助会員として想定しているのは、各公民館の下で、自治体と連携しているので、そのの方々を期待しているところです。少しずつ活動を開始しているのが実態でございます。

時間になりましたので、以上でございます。

(山岡委員長) ご発表ありがとうございました。

それでは、ただいまの発表に対して、委員の方からご質問はありますでしょうか。

(大久保委員) セミナーを何回かやられているということで、シニアのライフプランとか介護保険とか、対象は比較的年配の方が多いのかなという気がするのですが、ファイナンシャルプランニングみたいなものって、若いころからやっていて、老後につないでみたいなのは結構大事かなと思っています。住宅とかは比較的若い人向けになるのかなと思うんですけど、今後若い人向けのセミナーみたいなものの計画があれば、教えてください。

(湘南F P相談室) これは村岡地区の公民館、地域の自治会からの依頼でつくったドラフトなんですけど、我々は大きく3つのイベントで考えています。20代、30代の働き盛り、30代、40代、50代ぐらいの中堅どころ、それで今おっしゃったシニアという3つ

の大きなカテゴリーで、このサポート事業のセミナーなり相談を考えています。ただ、やはりシニアとか相続とかが多いのも事実です。若い人たちのリクエストというのは、まだまだ少ないのですが、来週ですかね、藤沢公民館から、若い人向けというリクエストをいただいております。なので、枠組みとしてはこんな形で我々は常に考えていて、50 ページぐらいのプレゼンなんですけど、問題解決のアウトプットを確実に出していくというのが我々の方針でございます。

(湘南F P相談室) 1つだけ追加しますと、若い人というのは、実は子どもの金銭教育も非常に重要なのです。子どものときからそういうことを意識的に持っていないと、いろいろ問題がある。アメリカなんかでは、子どものころからそういうのは独立して金銭教育をするということになっていますので、日本でもそういうことができるように、自治体に働きかけるとか、そういうことをしていきたいと思っています。

(原田委員) ファイナンシャルプランはすごく大事な視点だと思っていますし、特に若い方とか子どもの教育費に関しては、家計簿をつけていない方も多かったです。そういう視点が不足しているというのは感じるのですけれども、例えば、生活保護を受けたりすると、家計の管理なども行政のほうでやったりします。そういう点であったり、公民館で講演会をされたり、もっと広げていきたいということになると、市民自治であったり、福祉であったり、社協であったり、そことの連携を早急にとることが重要ではないか。そうすることによって、受益者をふやしていくという視点が必要かと思うのですが、そのあたりはどのようにお考えでしょうか。

(湘南F P相談室) おっしゃるとおりでありまして、過去やりましたセミナーの中でも、実際に各家庭の家計簿をお持ちいただいて、ライフプランというのは実は20年分ぐらいの予想をするのですけれども、その帳票の中に、具体的に自分の家のものを書き込んでいただく。例えば家を買うとか、子どもが結婚するとかそういうことも含めて、長期の計画を考えていただく。そうしたことをつくることによって、今後、例えば今回のようなコロナショックで突然離職をしなくちゃいけなくなったとかいうときに、じゃあどうしたらいいのかという対応ができるようになります。そういった意味で、おっしゃるようなことは、これからも進めていきたいし、公民館等とも協働しながら進めたいと思っています。

(原田委員) 行政とのかかわりが必要だのご認識されていると思うのですが、そのあたりはどのようにアクセスして、例えば3年間で行政との取り組みをどう進めていこうとか、

そういう具体的な策はおありでしょうか。

(湘南F P相談室) はっきり言いまして、こちらから持ちかけても、行政のほうがなかなか聞いてくれないという部分があるのですが、これからもう少し積極的に働きかけたいと思います。例えば、よその市町村ではF Pを利用してといたしますか、むしろF Pが中心になって相談を受ける、そして弁護士とかそういう方々に、必要なところに相談事を分けていくという活動もしているので、我々も先日、藤沢市の市民自治部の市民相談課に、そういう活動をしたらどうかというお話を一回持ちかけたのですが、そういう意味では、なかなか聞いてもらえない部分があります。

そのほか、現在、藤沢型地域包括ケアシステムというものを藤沢市全体で、トータルシステムとして遂行しようとしているのですが、その中に相談という事業といたしますか項目があって、そうしたものに、ご存じだと思いますが CSW が今、各公民館に全部入っているのかな、結構たくさんに入っていると思うので、そういう方々と協働して進めるとか、いろいろな進め方があると思うので、書きましたように、市民自治部、生涯学習部あるいは福祉健康部等とも話をして、事業の展開をしていきたいと思っております。

(坂井副委員長) 1つだけ伺います。お金にまつわるお話ですから、かなり個人的な、取り扱いに注意を要する情報だと思うのですが、その辺の個人情報の管理を会としてどのように考えておられるのでしょうか。

(湘南F P相談室) 私どもファイナンシャルプランナーは、日本ファイナンシャル・プランナーズ協会に全員所属して、資格をそこから付与されております。これは2年ごとに更改もありますし、結構厳しい資格なんですけれども、その協会では、きちんと倫理規程から始まりましていろいろな業務規程を持っております。それを我々は遵守することが基本になっております。例えば、今回リモートでお話しさせていただいているクライアントには、そういう遵守規定を具体的に書いて、こういうことを私どもとしては気をつけて守りますということを見ていただく、そういうことをしております。

(湘南F P相談室) プラスアルファでちょっとお話しします。実務運用の話になると、じゃ、リモートでやったときに、個人の家の中の情報とか、いろいろな課題はあると思っています。それは逆に、一般企業でも突然テレワークになっちゃった、どうしようという課題があるのと一緒で、今後の中でもっと詰める必要があるところは詰めていきたいと思っております。少なくとも我々は、今言った日本ファイナンシャル・プランナーズ協会の基本的ポリシーを守る。我々自身もその中で活動していく。

あと、ITインフラがすごく進化しているという状況におきましては、やはりセキュリティの穴が至るところに出てきていますので、それは適宜キャッチアップをしながら取り組んでいきたいと思っています。ファイルの管理はどうする、暗号化する、必ずパスワードをつける、やりとりはどうするとか、細かい話になると、まだちょっと詰め切れていない状況はあるのですが、基本的にはそういうベースで運用をしている状況でございます。

(山岡委員長) 最後、私から1つ、いいですか。助成金が終わった後のところで、賛助会員をふやしていくことを中心にと書かれているのですけれども、事業の中身を見ると、私は、賛助会員よりも、どっちかという受益者負担のほうがやりやすいのではないかなという気がしています。計画の中にも、20年度の途中から、2回目の個別相談有料化と書いてありますけれども、実際、今後有料化していくことの見通しはどうかということ。それから、セミナーのほうは有料化とは書いていないので、セミナーを有料化していく計画とか予定はあるのか。あるいは、そういうことはそもそも難しいのか。その辺をちょっと教えていただけますか。

(湘南FP相談室) セミナーについては、基本的には無料でやりたいなと思います。

相談につきましては、既に料金表もつくりまして、今回、先ほどちょっと申し上げましたように、リモートに対応している相談をやっておりますが、1件幾ら、あるいは1時間幾らという形の価格表もつくって、お客さんに提示させていただいて、そういう条件であれば、それじゃやりましょうという形で現在進めつつあります。ただ、それがどの程度本当にうまくいくのか、よくわからない部分があるので、まず1回目については、相談についても、90分程度は無料でお話を聞かせていただいて、その次にさらに詳しいお話になるのであれば、専門家にも相談をしながらやらなくちゃいけないと思いますので、有料化を進めていきたいと思います。

(山岡委員長) セミナーを無料にこだわるというのは何か……。私の感覚だと、これだけ評判の高いセミナーだったら、ほんの少しでもお金を取ることは結構いけるのではないかなとちょっと思ったりするのですが、そうではないというところにもし何かあれば。

(湘南FP相談室) やはり公民館等々公益な場所といえますか、実は第2回のセミナーもここを使わせていただいてやる予定で進めていたのですが、結局だめになりました。やはり公益的な場所を使うことがどうしても多くなると思います。そうしますと、無料というのが原則になるのかなと思っております。



(山岡委員長) それでは、時間になりましたので、以上で質疑を終わりにしたいと思います。どうもありがとうございました。

(湘南F P相談室) ありがとうございました。(拍手)

÷÷÷÷÷÷÷÷÷÷÷÷÷÷÷÷÷÷÷÷÷÷÷÷÷÷÷÷÷

午前 11 時 16 分 休憩

午前 11 時 25 分 再開

÷÷÷÷÷÷÷÷÷÷÷÷÷÷÷÷÷÷÷÷÷÷÷÷÷÷÷÷÷

(山岡委員長) それでは、5 番目、おととき ♪ さん、『『おと』の宅急便 出会いの『とき』を結ぶ事業』について、発表をお願いいたします。

(おととき ♪) 皆さん、おはようございます。おととき ♪ 代表の佐久間と申します。

まず、事業の説明に入る前に、私どもの団体について、ご説明をいたします。私たちおととき ♪ は、『『おと』による安らぎの『とき』を届ける』をキャッチコピーとして活動している市民活動団体です。基本的にクラシック音楽のコンサートを行っている団体なのですけれども、こういった演奏会というのはホールで演奏されることが一般的です。皆さんは、こういった演奏会はとても敷居が高いものとして認識されているのではないかなと思っております。そういったところで、ホール以外の場所で、身近に音楽を楽しむことができる機会、文化がないことについて、私はちょっと疑問に感じておりました。

一方で、藤沢市ジュニアオーケストラだとか湘南ドルフィンズ・マーチングバンドさんだとか、音楽に取り組む青少年が多い中で、そのまま彼らが音楽大学に進んで演奏家を志す人たちもたくさんいらっしゃいます。ただ、そういった学生や若い演奏家が地元で演奏したいと思っても、そういった活動の場がなかなかないという現状があることに気がつきまして、こういった状態だったら、彼らによる演奏会を自分たちでつくってはどうかというところで立ち上がったのが、このおととき ♪ となります。

活動の内容としましては、自主企画公演の実施、学童や保育園などの訪問演奏を実施することによって、藤沢市を拠点に演奏活動をしたいという演奏家への機会提供を行っております。

こういった活動を通じまして、私どもは、まず演奏会をしてほしいという会場または訪問先、こういった場所と、演奏の機会が欲しい、人前で演奏したいという若手演奏家、現役音大生、この双方のマッチングを行っております。

具体的に活動をご紹介します。こちらは自主企画公演の開催ということで、藤沢

本町にある有隣堂トレアージュ白旗店のフリースペースで行っている公演となっております。大体年間2回から4回実施しておりまして、30分ぐらいの小さいコンサートを1日2回行って、平均すると、40名から60名のお客さんが見えになります。

こちら（スライド）は学童や保育園での訪問演奏です。夏休みに行った訪問演奏なのですが、手づくりの楽器の工作を加えた演奏会という形になっております。また、地域イベントに参加しておりまして、写真（スライド）は藤沢市民まつりです。秋葉台のこもれび広場で野外ステージでの演奏会も行っております。

基本的に、この3つの形の活動を続けていたのですが、新型コロナウイルスの影響によりまして、このような事態が発生しております。

まず、最初にご紹介しました自主企画公演を行っている拠点でありました有隣堂さんのフリースペースが現在、コロナウイルス感染症の対策ということで、今、場所自体が利用できない状況になっております。それから、これまで長期休みを中心に依頼を受けていたアウトリーチ、訪問演奏をしていた先の依頼が今、ストップしている状態です。今年度は一度も予定が入っていない状況となっております。3つ目、参加していた地域イベントも今年度は中止ということで、演奏会の活動が全くできない状況が続いております。そこで考えたのが、こちらの『おと』の宅急便 出会いの『とき』を結ぶ事業という形になっております。

事業の目的についてです。まず、コロナの影響で演奏会がなくなった場に、今、可能な形で、私どものもとで生の音楽を楽しむ場をつくることを目的としております。頭のほうの図でご説明しました会場と演奏者、双方から声を聞いて、今できる形のを企画して実行する事業です。

具体的な手順としましては、まずは双方のニーズを調査したいと思っております。形式としてはアンケート調査を予定しております。こういった調査結果をもとにマッチングを行いまして、案件に応じた企画を実施してまいります。

アンケート調査の項目としては、以下のような形で考えております。まず、会場側としましては、演奏会の必要性です。私どもで学童さんに今年度、様子を伺いに、ちょっとヒアリングしたところ、やりたい気持ちはあるんだけどできないという声が多かった。とはいえ本当にやりたいのかどうかといったところがそもそものところだと思います。それから、必要ある、なしについて、その理由と内容。それから、実施したいという形でしたら、実施可能な範囲というものを調べる必要がありますので、IT環境、

広い会場を押さえることができるのかどうかなど、そういったところについて調査を行っていきたいと思います。

演奏家側のほうは、基本的に今、演奏活動ができるのか、できているのかどうかというところもそうなんですけれども、自身でレッスンをやっている人もいますので、IT環境を持っていたり、そういうスキルのある人かどうか、そういったところも調査対象となっております。

アンケート実施はこのような形（スライド）で考えております。「ハコ」というのは会場側です。自主企画公演を行っている有隣堂さん、学童さん、保育園さん。演奏家は、おととき♪の演奏会で演奏してくださっている6名の演奏家に協力をお願いしようと思っております。方法としましては、グーグルフォームを利用した入力型アンケートで、必要に応じてヒアリングを実施したいと思っております。

案件に応じた企画を実施すると申しているのですけれども、私どもはこのような形で実施を考えております。基本的には、演奏会、ビデオ制作、ITを利用したリモート演奏会。リアルでも、できることでしたらオン・オフ両方に対応したコンサートの実施という形で書いております。

基本的に助成金の使用用途としましては、こういったリモートを使った演奏会、ビデオ撮影等に必要な機材ですとか、あとは、いい音をとるために必要な場所をお借りするところの経費ですとか、そういった企画を実施するために使うお金と考えております。

今できる形で活動を再開できるように、私どもは生の音楽を楽しむ空間づくりをこれからも続けていきたいと思っております。

ご清聴ありがとうございました。（拍手）

（山岡委員長）ご発表ありがとうございました。それでは、ただいまの発表について、委員の方、ご質問をお願いいたします。

（鎌倉委員）事業の財政基盤についてです。助成金が相当のウエートを占めています。プロになりたい方々というのは、やはりどんなに安い料金であっても、お金を取るというのが、どうも命のように私には見受けられるのですね。お金を取らずに私の演奏をするというのはボランティアの、例えば幼児の方とか障がい者とか老人、それはそれで還元ということでやればいいのですが、このプロジェクトでやるのは、演奏を生でお届けすることなので、有料化、どんなお金でもいいのか、プランをどう考えるか、知りたいです。

(おととき♪) ご質問ありがとうございます。おっしゃるとおり、演奏家になりたい、それで食べていくということですから、お金を取っていくというのは必須だと私も思っております。ただ、この事業においては、基本的にアウトリーチ、訪問先からは通常も幾らか料金をいただいて行っております。そのお金を頂戴した上で、こういった形の事業を行うという対応をさせていただきたいと思っております。

この事業においてもそうですし、基本的には無料の公演であっても、投げ銭制度を取り入れて、お客様には、まずその演奏に対してお金を払うという文化も、私どもは習慣として覚えておいてもらいたいねというところもありますので、何かしらの形でお金をペイする、または演奏家にお金が入るという仕組みは、この事業においても取り入れていくというふうに考えております。

(原田委員) 事業の内容というか、今回の予算の中で、アンケート作成費用がかなり大きな額を占めているので、そういう意味では、ニーズ調査に重きを置いていると思うのですが、最初の説明がありましたように、演奏したい方と演奏してほしい方のマッチングということが活動の軸と考えるとよろしいのですか。そうすると、結構需要はあるんじゃないかなと思っています。例えば、この団体に「金額5万ぐらいでピアノの演奏等をしてくれる人をお願いします」と言ったら、いろんな方が登録されていて、そこに派遣するとか、そういうようなマッチングを軸とした活動のほうが、すごくニーズがあるんじゃないかなと考えるんですけど、それだけではなくて、ご自分の演奏だったりとか録音機材とか、そういうところにも広げていきたいということなんじゃないかなと思います。そのあたりをもうちょっと詳しく聞かせてください。

(おととき♪) 基本的にニーズがあることだなと思って、このマッチングの方法を考えたのですが、あくまで私どもとして大事にしたいのは、生の音楽を届ける。そうしてつくった空間を、演奏者、会場側、そして、いらっしゃったお客様、みんなに楽しんでもらうというところを軸としておりまして、このマッチングというのは、あくまで守りたい方針の一環として行うことを団体の大前提として捉えていかないといけないかなと思っています。

今回、マッチングという形をもって対象をある程度限定してそろえているのは、まずはこれまで築き上げてきた会場側、演奏家との関係性を、活動をストップした中でも続けていかないといけないということが、私どもが早急にやらなくてはならない事項だなと思ひまして、まずはこういった関係性を維持しつつ、それを事業化することができそ

うだったら、収益にもつながる活動も見えてくるかなと私どもは見ておりますので、ホームページを設立したりだとか、今後の活動の幅としては考えていきたいと思っております。

(坂井副委員長) コロナ禍の中で、活動にいろいろご苦労があると思いますけれども、現在の年会費は特に決まっていなくて、その都度必要な額を会員の皆さんがご負担されているのかなと。今後、例えばホームページだとか、恒常的にかかる費用も発生してくると思うのですが、あらかじめ最低限これだけは会の維持運営に必要な、その部分は会費で徴収しようとか、その辺の団体の運営について、どうお考えになっていらっしゃるのかお伺いしたいと思います。

(おととき♪) おっしゃるとおり、私ども、そのところはやっていかないといけないなというところは課題として感じています。運営体制もそうなんですけれども、会員となってくださる方には、やはり私どもの活動で何か恩返しをしていくという形になりますけれども、現在、活動が全くストップしている状態なので、まずはこの状況を打破して、申請書に書かせていただいた演奏家支援といったところもありますので、クラウドファンディングですとか、そういったものを取り入れながら、団体の運営にも着手していきたいなと思っております。

ただ、まずはこの状況を打破するといったところ一点で考えていたというのが正直なところなので、今後、団体運営の資金を定期的に調達するといったところは今後取り組んでいきたい部分ではあります。ご指摘ありがとうございます。

(林委員) 「アンケート実施概要」というところで、「目的」が「活動の方法可能性の模索」となっていて、活動のやり方を考えるということかなと思うのですが、一方で、オンラインでやる、リモートでやる、ビデオを制作する等のやり方が決まっているのか。そこら辺の、何をどう、方法はどのようなものを考えているか、ちょっと補足いただければと思います。

(おととき♪) 基本的に、どういった形で実施したいのか、アンケート調査した上で実施するという考え方はそのままです。ただ、それぞれの場所でどういったことをやりたいのかというのが、場所によって違うなと思いました。例えば、ココファンキッズさんは、夏休みは工作を取り入れたいというお話を毎年しておられまして、そういうところは、ビデオよりは、リモートでつながって、演奏家と対面でコミュニケーションがとれるのであれば、そういった方法がいいねという形で、あくまでニーズがあって、今大体予想

している方法、3つのうちどれで対応するのがいいのか、それができるのかどうか、そういう点に落とし込んでいく方法で実行していきたいというふうにイメージしております。

(山岡委員長) それでは、時間になりましたので、以上で質問を終わりにしたいと思います。ご発表ありがとうございました。

(おととき♪) ありがとうございました。(拍手)

÷÷÷÷÷÷÷÷÷÷÷÷÷÷÷÷÷÷÷÷÷÷÷

(山岡委員長) 続きまして、6番目、特定非営利活動法人湘南食育ラボさん、「湘南学園における出食、弁当配食、教育支援」について発表をお願いいたします。

(湘南食育ラボ) では、プレゼンテーションを始めさせていただきたいと思います。NPO 法人湘南食育ラボの黒川と申します。本日はよろしくをお願いいたします。

まずは、私どもの団体の活動理念や活動内容を軽く説明させていただきたいと思います。私たち湘南食育ラボは、食育基本法を大切に、成長期である子どもたちに対して食育を行い、食についての知識と食を選ぶ力を育て、心身ともに健全な人間を育成することを目的として設立されました。その後、学校法人湘南学園の教育事業の一環として食育を取り入れ、今では多くの生徒や教職員、保護者にカフェテリアを利用させていただいています。そして、食材にもこだわっていて、安心・安全の食材の調達、地産地消の実践。そして今、アレルギーを持っている子どもたちもすごく多いので、アレルギーシステムを導入して、子どもたちのアレルギーをパソコンで一括で管理しています。そして、何よりも人と人のつながりを大切に、子どもたちの学校内の1つの居場所でありたいと考えております。

平成 25 年 (2013 年) 6 月に NPO 法人湘南食育ラボは設立されまして、同年の 11 月よりカフェテリアの運営を開始しています。平成 27 年度からは、本格的に学校教育の一環として食育を取り入れて、学校とも連携して活動を行っております。

これ (スライド) が、これまでの取り組みと実績になっております。先ほどもお話ししたように、2013 年 11 月からカフェテリアを運営していて、2014 年度からは米農家より直接米の仕入れを行って、無農薬の米を使用しています。2016 年には、湘南食育ラボオリジナルの非常食を開発しました。カフェテリアができるきっかけとなった 2011 年の東日本大震災のときの炊き出しからの学びをもとに、非常時でもふだんと同じような食事をなるべくとれるようにという目的でカレーを開発し、今もカフェテリア

のメニューとして提供させていただいて、子どもたちにもすごく人気のメニューになっています。

これがふだんのカフェテリアや、お弁当を食べていただいているときの様子です。クラスランチといって、1学年で同じ食事をみんなでとるような様子だったりですか、家庭課の授業の中で食育を行ったり、栄養士による食の知識の指導なども行っています。

今までお話ししたとおり、学内での活動は、7年間という時間を経て、創設当初よりかなり充実させることができていると考えています。ですが、現状の課題としましては、これまで学内の活動の中で得た知見やノウハウなどを学外の活動に生かすことはまだ発展段階にあると考えています。

そして、添加物や既製品をなるべく使わない調理方法を採用しているため、一品一品に時間や手間がかかるというのも課題の1つかなと考えています。

今後の事業の目的と理想は、これまでに引き続き学内の子どもたちや保護者、地域の方には食育を行っていき、食や食育の大切さを知っていただき、生涯にわたり食を楽しめるようになっていただきたいと思います。

それに加えて、先ほども少しお話ししたのですけれども、今回の事業のメインとしては、学外の活動として、今年度のコロナウイルスの影響から、NPO 法人ラウレアさんという肢体不自由児預かり施設に弁当配食を行っておりまして、その施設から、障がいを持つ子どもたちの行動が食によってかなり制限されていることを学びました。なので、その子どもたちに弁当提供だったり、外食のサポートなども行っていきたいと考えています。それにつながって、ラウレアさんだけではなくて、ほかの障がい者施設や高齢者施設にもノウハウを伝えたり、地域社会の多様なニーズに応えていきたいと思っています。

そして、SDGs への挑戦としまして、かながわSDGs パートナーにも選んでいただけたので、湘南学園とも協働し、フードロスをなくす取り組みを实践するなど、それぞれの目標にも取り組んでいきたいと考えています。

先ほども少しお話ししたのですけれども、NPO 法人ラウレアさんというところは、肢体不自由児や医療ケアが必要な子どもたちが、学校が終わった後に行く学童のような場所で、遊びを提供する空間として活動しているところで、ことしの4月から事前予約制による弁当配食を開始しています。

これからは、今後の活動について詳しく話していきたいのですが、子どもたちや保護

者にもっと食育を広めるということは、今、コロナウイルスでなかなかできていないのですけれども、講演会だったり講習会は行っていきたくと思っています。そして、ほかの NPO、例えば先ほどお話ししたラウレアさんとかと協働し、お互いの学びによって、その内容を地域社会に還元し、多様なニーズに応えていきたくと思っています。そうすることで、多くの人が食の大切さや食の楽しみを知り、社会の活動を広げて、豊かな暮らしにつながっていくのではないかなと思っています。

そして、事業期間にやることや補助金の使い道なのですが、先ほどもお話ししたとおり、ことしの4月から弁当配食を行っているラウレアさんには、通常のお弁当では食べられない子どもたちがいるということを団体の理事長さんに伺って知りました。なので、①ミキサー食だったり、ソフト食しか食べられない子どもたちに向けたメニューの開発だったり、ノウハウの習得をしていきたくと思っています。その過程で、障がいを持つ子どもたちと湘南学園の生徒との交流などを図って、②活動の啓発だったり、地域社会の理解を深めていきたくと思っています。

そのノウハウを地域の方に伝える講習会を開いたりですとか、ミキサー食だったりソフト食でしたら、高齢者施設などにも応用できるかと思うので、③必要としている施設や団体と連携していきたくと思っています。そして、④今、湘南食育ラボには専任の栄養士がおりますので、栄養士と連携して、新しいメニューの開発だったり研究にも取り組んでいきたくと思っています。

最後になりますが、⑤通信環境の整備です。提携団体との通信環境を整備して、現在湘南食育ラボで使っている受注システムだったり、アレルギーセーフティネットなどをほかの団体さんとも協働して使えるようにしていきたいです。SNS を通じて、食の重要性をもっと発信していけたらいいなと思っています。

そして、この事業をまず契機に、障がいのあるなしだったり、年齢にかかわらず、より多くの人が楽しく安全に食を楽しめるようになってほしいなと考えております。

以上です。ありがとうございました。(拍手)

(山岡委員長) ご発表ありがとうございます。それでは、ただいまの発表について、委員の方からご質問等をお願いいたします。

(原田委員) これまでの活動は、湘南学園を基本として、その中での食事の提供であり、今後は他につながりを持っていくということなんだろうと思うのですが、他にとなったときに、NPO じゃなくてもお弁当を障がい児施設に配達しているところはいろいろ



ろあると思うのです。そこの違いというか、なぜ湘南学園さんの NPO がほかの地域に出ていって、お弁当を配達することが必要だと考えているのかをまず聞かせていただきたい。

(湘南食育ラボ) ご質問ありがとうございます。おっしゃっていただいたとおり、弁当配食だったりですとか食事の提供を行っている業者はもちろんたくさんありまして、高齢者施設とかいろんな施設に行っているところはあると思うのですが、私どもは、弁当提供を通じて、食育だったりですとか、障がいを持つ子どもたちがもっと自由にいろいろなところに出かけて食事をしたりですとか、食事に対する苦手意識とかもなく食事をして社会生活を送っていくということのために弁当提供を行っていきたいと考えているので、その弁当提供を行うことがゴールではなくて、それをきっかけとしていろんな食に触れ合ったりするようになっていけたらいいなと考えています。

(原田委員) 現状なんですけれども、何人体制で、何食ぐらいまでを限度として配食できるのか、お聞きしたいのですが。

(湘南食育ラボ) 今現在、ラウレアさんに 20 食くらい提供しているのですが、松下政経塾さんに、こちらで出食を提供しておりまして、その厨房でつくったお弁当を提供しているので、スタッフが入ることが可能でしたら、もう少し食数をつくることは可能だと思います。

(原田委員) 現状は、スタッフとしては何名ぐらいいらっしゃるのですか。

(湘南食育ラボ) 湘南食育ラボの調理スタッフとは別に、松下政経塾でつくっているスタッフは、一回に 2 人か 3 人ぐらい入って調理しております。

(山岡委員長) 今の質問とも関連して、この事業は、ラウレアさんへの弁当配食がゴールではないということだと思うのですが、その先につながるようなこととして、この事業年度の中では例えばどういうことをされるのか。ノウハウを広げていくとか、メニューやレシピを開発してそれをホームページに公開するとか、そういうラウレアさんへの弁当配食だけではないんだよ、その先もやっていくんだよということがこの事業年度の中では、具体的にどういうことがあるのか、教えていただけますでしょうか。

(湘南食育ラボ) スライドを少し戻るのでありますが、3 番で説明したとおり、メニューだったりレシピを開発して、もちろん SNS に載せたりですとか、そういった対面しない形で伝えていく方法もあると思うのですが、ラウレアさんの理事長の方から、障がいのある子どもたちは、外食するときも、お店にあるメニューを注文できなかった

りして、持ち込むことしかできない状況が今あると伺ったので、藤沢市内の飲食店とかにメニューだったりレシピを伝えたりして、置いていただけるお店をつくったりですとか、置くことは難しくても、そういうものへの理解を深めたりする講習会などを行いたいと考えております。

(山岡委員長) そういうことも同時並行で進めていただけると、公益事業としてやる際の狙いとかがすごくわかりやすくなると思いました。

ほかにいかがでしょうか。では、特になければ、以上で質問を終わりにしたいと思います。ご発表をありがとうございました。

(湘南食育ラボ) ありがとうございます。(拍手)

÷÷÷÷÷÷÷÷÷÷÷÷÷÷÷÷÷÷÷÷÷÷÷÷÷÷

(山岡委員長) 続きまして、7番目、湘南市民ワークショップさん、「市民活動オンライン化～WS・ライブ配信」について発表をお願いいたします。

(湘南市民ワークショップ) 湘南市民ワークショップ代表の清水と、メンバーの宮崎です。よろしくをお願いいたします。

まずは、私たちの活動についてご紹介させてください。私たちは、市民講師であるメンバーが多いのですが、この3つの目標を軸に活動しています。メンバーで、さまざまなジャンルのワークショップを開発し、イベントも主催してきました。こちら(スライド)は、宮崎さんのやっぴらっぴらシンクロナイズドスイミングワークショップや水着づくりの写真です。

一般企業や商業施設などでもご依頼いただいて、ワークショップをやる機会もふえましたし、2つ目の目標、講師同士の交流や勉強を進めるべく、月に一度の定例会も行ってきました。そして、市民団体として活動してきたことにより、信頼度が高まって、市の主催でワークショップを行う機会もふえてきました。このように、スプレーアート、シンクロ、ジオラマなどで、市の主催でやらせていただいております。市主催のイベントにも必ず参加してきました。私たちのブースは人気で、このように(スライド)行列ができていたのですが、今となってはこれも幻のようです。行列ができたというのが夢のような感じです。

そして、私たちが昨年立ち上げたプロジェクト「浜辺の歌サンバ2020人で踊ろう!」、この企画が2020応援団 藤沢ビッグウェーブのアイデアソンで採択されました。具体的には、藤沢辻堂の海岸のイメージでつくられた「浜辺の歌」を楽しいサンバにアレン

じて、市民の皆様とオリジナルのパフォーマンス作品をつくり、ほかの市民団体さんとも共催として連携しながら、また、オリパラの公式な応援プログラムとしても、このようにマークをつけさせていただきましたが、認証していただいて、活動してきました。そして、本当にさまざまところでパフォーマンスさせていただいて、江の島やセーリングの取材で撮影させていただいたり、ご厚意でクルーズ船にも乗らせていただいたり、湘南台の駅地下でもやらせていただきました。

そして、この宮崎さんが、まさにオリンピックの選手を育てている、小谷実可子さんなども指導されたことがあるシンクロのコーチですので、上の写真（スライド）は湘南高校の生徒さんたちですけど、一緒にワークショップをしたり、プロモーションビデオの撮影も、藤沢市水泳協会の協力もいただきながら、実施してきました。地元紙やテレビでも、このように取材をしていただきました。

しかし、順調に進んでいたこの企画、コロナにより全面的にとまってしまいました。オリパラ自体が延期となってしまいましたし、このように、湘南と、震災の被災地である福島、聖火リレーの出発地点でもあったここで合同で練習して、いわきのサンバカーニバルに出演したり、ゴールデンウィークには、みらい子どもフェスタでシンクロの発表をする予定もあつたのですが、全て中止となってしまいました。パラリンピックを見据えて、障がい者施設、老人介護施設でも撮影するはずでしたが、全くできません。

そのために私たちは、いかに早くオンライン化を進められるかということを考えております。この企画、途中でとまっていて、楽しみにしてくれている方たち、いっぱいいらっしゃるのです。団体の会議自体はZoomで再開しましたけれども、会員によるワークショップ、そして、そういった成果発表をするステージとかもありませんので、全てをオンライン化したいと思っています。プロモーションビデオ撮影自体も来年のオリパラ開催までを目標に設定し直して、オンラインで撮影、編集をしていきたいと考えています。

どのようにやるのかというご質問がありました。私が4月からオンラインで、この団体ともコラボしながら進めてまいりましたので、映像をごらんください。

（動画）

まず、「コロナに負けるな」というタイトルで、私が作曲したオンライン・アンサンブルです。はっきり言って、ビデオ通話は音楽には全くよろしくありません。遅れまわります。その遅れを気にしないで、みんなで楽しめる。簡単な記号や、簡単なイラスト

を見て、それを即興的に演奏あるいはダンスをするというものです。

これは6歳のお子さんから70代の、私のことですがけれども、そして、障がいのある方、おわかりでしょうかね、視覚障害の方が、全盲の方が参加してくださっています。このように、本当に簡単で、即興的に楽しめるものです。これはZoomでやっておりますけれども、すごく楽しいのでよかったです。宮崎さんは、全くZoomもできなかったのに、今や定例会議にも出てくださって、ワークショップも出てくださっています。ちょっとお話を伺えるでしょうか。

(湘南市民ワークショップ) 恥ずかしながら、この2月ごろからオンラインとリモート、Zoom会議、テレワーク、なんじゃそれ。それがわかったふりをして参加している、そういう市民の代表。藤沢市にはそういう人がいっぱいいると思います。でも、わかったふりをして、こういうところに参加をして、息子にこづかれながらやっていたのが、今やちゃんとできるようになりました。これからも挑戦したいと思います。

まだまだ不備なところもあって、皆さん、だんだん上手になっていくんじゃないかなと思っています。

(湘南市民ワークショップ) このように、いろんなジャンルのことができるメンバーがいますので、ワークショップをオンラインでやりたい。そして、プロモーションビデオ撮影をどうやってやるのか。

(動画)

これは私のピアノ教室です。4月の緊急事態宣言以降、全面的にオンラインレッスンに切り替えました。4月にピアノの発表会を予定していたのですが、開催できなくなり、オンラインレッスンで1カ月やった後に、オンライン発表会をやったものです。レッスンも一切、会っていない、発表会も各自のお家からやっています。このように、ちゃんとした曲でも、工夫すれば、プロモーションビデオもできますので、こういった方法で2020人のプロモーションビデオをつくりたいと思っています。

初めは、2020人でビーチクリーンと一緒に撮影したりとか、一挙にたくさんの人数で1本つくって、ユーチューブで公開して、全国、海外にも湘南の魅力を広く伝えていこうと思っていたのですが、そういうやり方じゃなく、皆さんでたくさんのプロモーションビデオをつくって、2020人に至りたいなど。そういうふうに発想を転換しています。

私自身の仕事はそのコンサートや作曲が本業ですが、私の周りの音楽やアートの仲間

も本当にコロナの影響は深刻です。私たち2人とも長年、音楽、そしてシンクロを子どもたちに教えることを仕事にしています。こんなときだからこそ、音楽や芸術、スポーツが人間に必要なだと信じています。

福島との交流も実現しませんでした。さっきのオンライン・アンサンブルなら同時に音を出せる。これは後で編集して、プロモーションビデオをつくるという方法です。両方やりたいですし、少しでも早くコロナに左右されないオンライン活動を軌道に乗せて、市民活動や芸術活動のオンライン化の前例となれることを目標に頑張ります。ありがとうございました。(拍手)

(山岡委員長) ご発表ありがとうございました。それでは、ただいまの発表について、委員の方から、ご質問等をお願いいたします。

(原田委員) コロナ禍で行えなくなったワークショップをいかに開催していくかというところで、オンラインということだと思うのですけれども、オンラインで音楽提供のワークショップをやっていくということだけだと、ちょっと弱いかな。実際、ネットの中でそういう活動をされている団体はいっぱいあるわけですけれども、団体としての強みというか、そういうところはどのようにお考えでしょうか。

(湘南市民ワークショップ) インターネットでそういう音楽があると思うのですが、このようにリアルタイムに、相互でというのは、なかなかできていないんじゃないかなと思います。

このワークショップをZoomでやりながら、先ほどのオンライン・アンサンブルというのは、ユーチューブライブに同時配信しているんですね。皆さん、こういう発表会もそうですけど、限られた中で練習しているだけでは、モチベーションがなかなか上がりませんので、発表を同時に行うという形をしたいと思います。

ライブ配信というのは、もちろんどこでもやっているのですけれども、私自身が音楽を専門にしていますので、音質のいい配信を今、試行錯誤してやっています。実際にユーチューブライブ配信を今まで5回イベントでやってきて、その中でさっきのワークショップを公募で集めたのです。ウェブ上で集めたので、関西の方とかもいらしてください、オンラインならではですけれども、地域、国を超えてやるということ。今までも、地元の方が、この地元ゆかりの音楽を使って、地元を誇りを持ってやるということが目標で、でき上がった2020人でつくった映像をユーチューブに上げることで、国際的にも見てもらえるだろうと思ったのですが、そうじゃなく、練習の過程からどんど

んユーチューブライブ配信で、アップしていきたい。

また、ユーチューブライブで配信すれば、編集しなくても、そのままアーカイブで見られますので、すればするほどたくさんユーチューブが上がっていくわけです。なので、成果発表も、ワークショップも、もちろん会員同士の、まだまだIT、オンラインに不慣れなみんなが助け合うということも、全部オンラインでできるようにやっていく。そして、そういった仲間をふやしていく。そういうことが私たちの強みだと思っています。

リアルはもちろん私たちは今までやってきたので、コロナが終われば終わる。でも、終わらないと思うんですね。正直、オンラインなしには戻れない。私も最近、コンサートの仕事にやっと復帰したのですが、有料配信と組み合わせています。それなしではあり得ないので、オンラインのメリット、リアルのメリット、両方生かして活動していくことが強みになると思っています。

(原田委員) 音楽以外のワークショップに関しては、オンラインでどのようにやっていくのか。例えば、シンクロナイズドスイミングとか、そのあたりはどのようにお考えでしょうか。

(湘南市民ワークショップ) 世界では、リモート世界大会というのをアメリカとカナダの友達が立ち上げてやっています。それは基本のシンクロ。お水の中ではありませんけれども、基本の姿勢の柔軟度を競うようなものでやったりしています。ですから、時期がちょうど同じでやり始めているのは、やっぱりフロンティア精神のアメリカだなと思っているのですけれども、やれるやり方はたくさんある。

藤沢でも、アーティスティック・スイミングって、踊るほうに考えますけれども、基本は浮き身ですので、防災的に、津波に襲われたときに体を自分の力で浮かせているということにもつなげていきたいと思っています。この間ちょっとテストしたのですけれども、浮き身の手の動作の仕方なんかはできました。

(湘南市民ワークショップ) ほかに絵を描くとかいろんなジャンルの人がいるので、それぞれがこうやって話し合う中で、自分のワークショップ、得意なものをどうやってオンライン化していくかということを見つけれられる、実現できると信じています。

私は音楽のほかにダンスの担当をしているのですが、ダンスは多人数で結構できるということは実際にやってみてわかっています。

(坂井副委員長) コロナに負けるなということで、意気込みをすごく感じたところですけども、将来、何年かかるかわからないけれども、コロナ禍がおさまった後のことはど

う考えていらっしゃるのか。つまり、リアルのほうに完全に回帰していくのか。それとも、オンラインのこれはこれとして別の価値をここに付けて、これはこれで継続しようとしているのか。そのあたりのお考えを伺いたと思います。

(湘南市民ワークショップ) 先ほど申し上げましたとおりに、並行してやっていくつもりです。オンラインをやりますと、やはりわかることがありまして、先ほども言いましたが、有料のコンサートをやっても、関西の方とかが見てくださる。お家を出られないという方も見てくださるわけです。

そして、オンラインレッスンをやって感じるのは、グレーゾーンの生徒さんとかもいるんですけど、かえってリアルピアノレッスンよりも、オンラインのほうが集中してくれるんですね。画面だけ見ていればいい。私は数分しかもたないんじゃないかと思ったら、かえって45分全部、すごく集中してやってくれたので、オンラインならではの可能性はたくさんあると思います。

今までどうしても地元の、湘南だけに限って考えがちだったのが、今すごくグローバルに、地域も超えて、障がいの有無も超えてできるなと思っているので、オンラインと並行してやっていきたいと考えています。

(坂井副委員長) それに関して1つだけ。将来的にやるための活動経費、活動費の確保ですね、そのあたりのお考えを伺いたと思います。

(湘南市民ワークショップ) 私のコンサートは、自分でファンの方たちに、さんざん「これでお金を出してもいいですか」という音質をテストしまくって、いいというので、有料化に踏み切りました。ワークショップに関しては、正直言って、年内は有料化は無理だと考えています。まず、受ける方がいるかわからないんです。会員自体、なかなか乗り気ではない人ももちろんいます。

しかし、こちらに書いたんですけど、受ける側も、私立と公立の学校で、授業をオンラインで受けている子もいれば、全くやることがないという子もいて、オンラインは格差がすごく激しくて、受ける側も、ぜひ頑張ってもらいたい。うちの生徒さんの中でも、ご家庭でも、パソコンはちょっと無理という方がいたんですけど、無理やりというか全員にやっていただいたら、お母様が、塾の先生なんですけど、「リモートに慣れているからって、すごくシフトがふえて、仕事がふえてありがとう」なんて後で言われたので、みんなオンライン化するということをぜひぜひやってほしい。それが浸透するまでは正直お金は取れないと思っていますが、長い目で、1年や2年後にはもっと安定してでき

たら、ワークショップを有料化して、また今までのように、健全な運営を目指したいと思います。

(山岡委員長) 私から1点質問です。音楽の場合は、オンラインになると、著作権がいろいろ大変なんじゃないかなと思ったりするのですけれども、その辺は予算の中には特に入っていないですね。その辺の問題はクリアされていると思ってよろしいのでしょうか。

(湘南市民ワークショップ) 私たちは、先ほどのもそうですが、オリジナルか、著作権が切れた地元ゆかりの音楽をアレンジしているので、著作権はかからなくて、今のところユーチューブのイベントをやっております。

(山岡委員長) ほかにいかがですか。よろしければ、以上で質疑を終わりにしたいと思います。ご発表ありがとうございました。

÷÷÷÷÷÷÷÷÷÷÷÷÷÷÷÷÷÷÷÷÷÷÷÷÷÷÷÷÷÷

(山岡委員長) 以上で、全ての企画のプレゼンテーションが終了しました。発表者の皆様、ありがとうございました。

本日の講評です。

皆さん、お疲れさまでした。コロナで、市民活動はどうしても、いろいろなところのアンケートを見ると、少し活動が停滞しているとか、場合によっては中断していますとか、団体によってはやめますとか、そんなこともすごく多い状況です。これはある意味、やむを得ないのかもしれないのですけれども、そういう状況の中で、こういうふうに活動をさらに押し広げていこう、発展していこう、できることを探っていこうと皆さん思われていることに私はすごく励まされました。

他方で、こういう市民活動というのは、こういう危機において、新しい可能性とか先駆性、冒険性とかというのですけれども、むしろここで新しい価値とか新しい可能性みたいなものを見出す。その一番最初を踏み出していくのは市民活動団体だだったりすると思うので、他方でこういう時期こそ役割があるなとも思っております。そういうことも、全てではないにしろ、きょうの発表の中から見え隠れしていたなということで、私はすごく興味深く聞かせていただきました。

これは報告会ではなくて、審査の発表なので、いろいろちょっとデリケートなところもあるのですけれども、とにかく藤沢という地域の中で、こういう状況にもかかわらず前を向いて活動されている団体があるということであれば、それは行政としても、しっかり支えていくことが今とても重要ではないかなと私は思っております。



この後、審査があるわけですが、それはそれとして、ぜひ皆さんそれぞれの場所で、今ここでご発表いただいたことを、もちろんプレゼンだから、いろいろ作り込んでみたいなどころもあるかもしれないのですが、それぞれの現場において、諦めずに進めていただきたいと思います。

以上、講評でもないのですが、まとめというか、コメントさせていただきました。どうもありがとうございました。お疲れさまでした。(拍手)

それでは、ミライカナエル活動サポート事業スタート支援コース・ステップアップ支援コース審査会における公開プレゼンテーションを終了いたします。

÷÷÷÷÷÷÷÷÷÷÷÷÷÷÷÷÷÷÷÷÷÷÷÷÷÷÷

○事務局からプレゼンテーション終了の説明がされた。

÷÷÷÷÷÷÷÷÷÷÷÷÷÷÷÷÷÷÷÷÷÷÷÷÷÷÷

## 議題2 ミライカナエル活動サポート事業スタート支援コース・ステップアップ支援コース審査会（非公開）

○議題2については、藤沢市情報公開条例第6条第3号に基づき、非公開とすることが決定された。

(議事内容は非公開)

÷÷÷÷÷÷÷÷÷÷÷÷÷÷÷÷÷÷÷÷÷÷÷÷÷÷÷

## 閉 会

(山岡委員長) それでは、これをもちまして、ミライカナエル活動サポート事業スタート支援コース・ステップアップ支援コース審査会を終了いたします。本日は長時間にわたり、円滑な議事進行にご協力いただき、ありがとうございました。

午後1時9分 閉会